

中国訪書余話

茨城大学名誉教授、南京中医薬大学客員教授
真柳 誠

私は35年前の3年間、北京の語言学院と中医学院に留学して以来、ずっと医薬と古医籍の歴史を専門としてきた。帰国後は北里研究所と茨城大学で中国から20名以上の研究者や留学生を受け入れてきたので、彼らを頼りにした古医籍の中国訪書調査も数えきれない。2003年の夏休み、各地を1人で訪書した記録があったので、紹介してみよう。

この時は北京中心の滞在で、科研費を節約するため、梁永宣北京中医薬大副教授に仲介いただいた2DKの賃貸マンションに1ヶ月住んでみた。家賃に電気・ガス・水道・電話代を含め、3,000元でおつりが来たと思う。アジア運動村に近い北郊外にあり、都心まで小1時間かかるがバス便も多く、大型スーパーが付近にあって不自由はない。部屋には生活用品すべてが完備しており、きわめて順調に暮らすことができた。

マンションに入居し、しばらく北京で訪書や講演をした後、各地にでかけた。まずフフホトの内蒙図書館で1週間の調査。そこから瀋陽に飛んで中国医科大学図書館、ついで南京図書館、広州の中山大学図書館、そして北京に戻るという大旅行だった。

この訪書目的の第1は現存するモンゴル刊写の古医籍調査(図1)、第2は明・趙開美版『仲景全書』の版本確認だった。フフホトと瀋陽では収穫があったものの、南京と広州では徒労に終わってしまったが、いま想うとなつかしい。南京図書館では沈澍農南京中医薬大教授の助力で所蔵の『仲景全書』を閲覧したが、すべて和刻の『仲景全書』でまず落胆。

広州では中山医科大学に清初刊らしい『仲景全書』が所蔵されると目録にある。ところが同大は中山大学に近年合併され、蔵書は広州から列車で数時間の珠海にある新キャンパス図書館に移されたという。しかし古医籍は広州の中山大図書館にあるかもしれない、という情報を一縷の望みにでかけた。だが全



図1 内蒙古図書館蔵の蒙古本(清末筆写)『本草簡解』
中国本にない幅広で、行は左から右へ進行し、茅紙ないし馬紙という初見の料紙だった。

蔵書はやはり珠海の新図書館に移動しており、梱包が解かれて閲覧可能になるのは2006年ということが中山大図書館に行ってやっと分かった。これにも落胆するしかなかったが、百年を越す中山大学所蔵古典籍の片鱗を知ることができ、古籍書誌が専門の黄仕忠同大教授の知遇を得たのは幸いだった。

以前と違ったのは、航空券の購入やホテル宿泊が簡単かつ安くなっていたこと。航空券は航空会社の窓口でも空いている便ほどディスカウントされる。搭乗直前に空港内の旅行社で買った広州→北京便是40%の値引きで、まさにホクホク。宿泊も空港からタクシーでまず目的の図書館に行き、ついで付近の適当なホテルへの飛び込みで問題なかった。フフホトと瀋陽ではディスカウントの部屋に入れ、ボラされることもない。広州では大学横にあった海運機関の招待所に飛び込んだが、すんなりとクーラー付の大きな部屋に150元ほどで泊まれた。きっと現在はもっと高いが、もっと便利になっているのだろう。